令和８年度 第一回山梨県文学館協議会　会議録

開催日時：　令和８年８月２８日（水）13:30～15:15
場　　所：　山梨県立文学館研修室
出 席 者：　委　員：落合直樹、高山珠逢、西田遙、長谷川千秋、古屋孝樹、三柴忠宏、
　　山田茂之、山本久美子
　　事務局：（文学館）三枝館長、和光副館長、深澤次長、中野学芸幹、
　　内藤教育普及担当リーダー、小林資料情報課リーダー
　　高室学芸担当指導主幹、保坂学芸担当指導主幹
　　（指定管理者）SPS やまなし 支配人、マネージャー
次　　第：　開　会
　　会長あいさつ
　　館長あいさつ
　　議　事　　報告事項　令和７年度事業報告について
　　令和８年度事業報告及び予定について

会議録：

議　長　　ただ今の事務局の説明について、ご意見、ご質問などございますか。

委　員　　ご説明いただきありがとうございます。大変活動されていて非常に素晴らしいなと思いました。最後の 33 頁のコレルさんとの企画メニューなんですけど、回遊性向上を目的にされていると思うんですけど、何か反響など、もしあればお聞かせ願いたいです。

事務局　　ありがとうございます。ちょっと数字が今手元になくてですね、どれくらいメニューが出ているのかというのは、詳しくは確認できていないのですが、注文いただいている方が非常にいらっしゃるというのは、私もお話を聞いています。レストランもそうなんですけれども、もちろん美術館にも、入口にこの「かがくいひろし展」のポスターを掲示しまして、美術館からのお客様、せっかくなので両方見ていってねというかたちで案内をしながら、今回は文学館の方が非常にお客様がいっぱい入っておりますので、こちらに来た方も美術館に来てくださいね、という話もしながらですけれども、せっかく２館が同じ敷地内にあり、私ども２館一緒の指定管理者となっておりますので、こういったところで連携は、今後も強めていきたいと考えております。

議　長　　ほかにいかがでしょうか。

委　員　　すみません、2 点教えてください。31 頁のところにインタラクション率というのがあ

るんですけれども、その率の母数が何かということが一点、もう一点が今回「かがくいひろし展」は2万人超えているということなんですけれども、その2万人という目標はどういう考え方なのかということについて教えていただきたい。なにかパッと見た感じ、銭天堂展の数字くらいかという感じで設定したのかという感じがしたんですけれども、ちょっとその具体的な目標の考え方を教えていただきたい。

事務局　インタラクション率の話ですけれども、こちらはフォロワーの数に対してどれぐらいの反応があったかという率になっているものになります。33頁のかがくい展に、閲覧率、リーチ率、インタラクション率と書いてますけれども、観覧いただいてかつ、アクションしていただいた人の数、「いいね」などをしていただいた人の数ということになります。それぞれ、右側カッコの中の数字が標準とするところで、これを超えていると非常に反応が良いと言われています。数値は美術館、文学館同じインスタグラムになりますけれども、フォロワー数に対してどれぐらいの人数が反応してくれたかの指標になります。

委　員　フォロワー数値は何人なのでしょうか。

事務局　今、最新のフォロワー数では5,705人ですね。

委　員　フォロワー数5,705という数字というのは、多いと考えているのでしょうか。もう少し頑張らなきゃいけないという数字なのでしょうか。

事務局　これはもう増えれば増えるほどいいので、これで当然満足しているものではないので、もっともっと増やしていきたいとは考えています。

委　員　他の公立の博物館や都内の美術館などと比べるときに、その数というのはどういうふうな位置づけになるのでしょうか。

事務局　美術館とか博物館にもよりますけれども、正直決してこれが多い数字だとは考えていないです。東京とかの本当に大きなところだと、何万、何十万というところもあると思うんですけれども、地方の文学館、美術館になりますと、本当に多いところもあれば、少ないところもあるかなと思うんですが、まだまだ増やせる余地はあるかと考えておりますので、もっともっと、上限はありませんので、増やしていければと考えております。

事務局　ご質問二点目の展覧会の目標観覧者数についてですが、目標値の決め方は類似の展覧会の一日平均の数を参考にしながら、設定しております。今回の「かがくいひろしの世界展」の場合ですと、令和5年度に開催した、「ふしぎ駄菓子屋銭天堂」という児童向けの図書、それからアニメにもなっている作品の巡回展を行っているのですが、そのときが2万を少し超えた数の観覧者数がありました。今回、通常の企画展より多少会期が長

めになっておりまして、そこで一日平均の日数を掛けて、2 万人というふうな数値を目標値としたところになります。

委　員　　わかりました。ありがとうございました。そんな感じかなと思っていました。一方で小学校の生徒数、児童数というのが３万６千人くらい、中学生が２万人くらいということだったので、もし親御さんと一緒に来てくれたらば、２万人のうちの半分ぐらいのお子さんになるとすると、要するにどのくらいの県内の子どもさんに見てもらうとかという感じで、その目標を立てているわけでは決してないということなんですよね。目標と言いつつ、過去の実績の参考数値のかたちで、この数字を達成することがどういう意味があるのかというと、数字ではなくて、このくらいいけば多かったかな、というような感じの数字ですね。

事務局　　企画展の場合は、テーマによって多かったり少なかったりという見通しが、過去の実績からある程度立てられるだろうという予測のもとで、テーマの中で類似の展覧会をふり返りながら、そこにこのくらいはいきたいという数値を掲げて設定をしております。

委　員　　学生という立場から意見を述べさせていただくと、「昭和文学をふり返る」展の成果と課題というところで、普段、文学館に来る機会が少ない層の来館機会を醸成できたと言われました。若者も文学館に来る機会がかなり少ない層だと思うんですけど、そういった層の来館を促すきっかけとして、例えばワークショップだったり、今やっている絵本のテーマといった親しみやすい企画が一つあるというのが大事だと思いました。私も「かがくいひろし展」に実際行かせていただいたんですけど、文学館に詳しくない人とか子どもでも入りやすい企画が、文学館自体を知るきっかけとしてすごく良いと思いました。こういった親しみやすい企画というのは、例えば私たち学生同士でも、何か面白そうなイベントがあるということで、誘って訪れるきっかけが作りやすいと思いました。先程、観覧者数というところのお話があったんですけど、一回訪れることで体験を持ち帰れるので、他の人をまた誘ったりとか、文学に興味を持ち始めたりすることができるので、一回で終わらせずに次に繋げることができるので、観覧者数を増やすということも大事なのかなと思いました。そういった来館が少ない層の、学生や若者たち、そうでなくてもいいんですけど、どういったイベントなら文学館に行ってみたいかというところを、その人たちに聞いてみて、職員の方と一緒に一つの企画を作ってみるような取組があってもいいのかなというふうに思いました。

事務局　　貴重なご意見をありがとうございました。学生や、小さなお子さんがいらっしゃるご家族など、文学館の敷居が高くてなかなか来館しづらいというお声は、耳にすることがあります。今回のかがくいひろしの展示は、そういった今まで文学館へ足を運んだことのないような層の方に多く来ていただいていると思います。若い方もそうなんですけれど、かがくいひろしという絵本作家が特別支援学校の教員だったということがありまし

て、今回オープニングセレモニーに甲府支援学校の校長先生にも来ていただきました。そこから、支援学校の先生方や、生徒さんもまとまって、見学に来てくださいました。これまでご縁が持てなかった特別支援学校の生徒さんに文学館をご利用いただけたということは、大きな実績であり、文学館にとっても非常に意味のある企画になったと思っています。先程資料の中で説明した、19 頁に掲載している「ＺＩＮＥフェスティバル」という、手作りの雑誌をそれぞれが作ってきたものを、無料で交換するという催しですが、こちらが本当に若い方が積極的に参加してくださっている事業の一つになっています。高校のクラブ活動であったり、大学のサークルであったりという方々が参加して、いろいろな工夫を懲らしたＺＩＮＥを出品してくださっています。こういったところからも若い方の声を聞きながら、また新たな試み、企画ができれば良いかなと考えております。本当に貴重なご意見をありがとうございました。

委　員　　私も今年、ＺＩＮＥフェスティバルにまた参加させていただいて、いろんな世代の人と交流することができて、とてもいい機会になりました。ありがとうございます。

議　長　　ありがとうございました。他にいかがでしょうか。関連してでもよろしいですし、また違うところからの切り口でもよろしいかと思います。

委　員　　私は昨年度から 2 年目になるんですが、昨年度の 2 回目にこの会があったときに、私もよく分かっていなかったので、観覧者数を増やすことが大事かなという話をさせていただいたと思うんですけれども、そのときに山梨県の文学館ならではの魅力も出していきたいということで、本物を展示するという中の昭和での 100 年というお話をお伺いしたので、私も実際来ました。書いてある原稿とか読むと、もちろん観覧者数ということでは「かがくいひろし展」と比べると、少ないのかも知れませんけど、やはり熱い思いというか、山梨県ならではの、ゆかりのある太宰治であったり、芥川龍之介であったりとか、私も観させてもらって、普段ならすーっと通ってしまうところをじっくり観させていただいた気がします。やはりそこはそこで一方で、大事にしていっていただきたいなって本当に思いました。今回、同じように「かがくいひろし展」も観させていただいて、本当に良くて、もう一回来たいなと思いました。私が来たのは始まって三日目くらいだったんですけど、子どもや家族連れが非常に多くて、小さな子どもたちがあそこに座って、画面を観たりとか、絵本も全部展示してあるのを触って開いて読めるといったかたちで、本当に楽しそうに親子で読んでいました。私もかがくいひろしのことをそんなに知らなかったんですが、あそこに書いてあるのをいろいろ読んでみると、支援学校の先生をしていて、ずっとその子どもたちのために、一生懸命、自分の手作りの作品を使いながら授業をやっていったとか、家族や娘さんの言葉が書いてある文を読んだりとか、一つ一つに、ただ、かがくいひろしの本が楽しいということだけでなく、やはり子どもが対象であったり、親が対象であったり、おじいさんが対象であったり、いろんな人を対象に網羅した展示になっていることで、非常に感銘を受けています。それで、今

回この後の樋口一葉のことも、すごく楽しみにしていて、本当に楽しい企画があって、これを皆さんに上手くご意見等を聞く中で、本当により多くの方に広がっていくことが大事かなと感じてます。学校関係者としては、今回も教育普及担当の方から各学校に、「教師のための学習会」というチラシも来ているので、時間帯が時間帯なので、大変なのかも知れませんけれども、なるべく私も自分の職場の先生方に声をかけて、そこからまた伝えていくことって、博学連携になるのではないかと。逆に学校でこういうこともももっとできるんじゃないかということもお話していただければ、私も公立小中学校の校長会へ出させていただいているので、またそこへも広げていただきたいと思います。数を増やすことだけと思っていたんですけれども、この魅力をうまく伝えていく方法がないのかなとすごく感じていて、今日来ている皆さんのご意見を聞きながら、私も参考にしていきたいなと思います。

事務局　大変心強いご意見をありがとうございます。昭和文学の展示では文学館が開館してから 37 年くらい経つ中で、蓄積してきた資料というのがたくさんありまして、そうした資料の中で「昭和文学をふり返る」という展示ができました。かがくいひろしのような派手なところはないのですが、地味ながらも文学館の大事な実績だと思っています。そういった魅力のある資料をより多くの方に見ていただいて、知っていただくことは、評価指標の大事な一つだと思いますので、また皆様にお知恵をいただきながら、どういったかたちで文学館の魅力を広げられるかということを、今後も考え続けていけるといいかと思いました。

議　長　ありがとうございます。他にいかがでしょうか。

委　員　次に説明があるかも知れませんが、目標をどういう設定にするかということについて、まさに観覧者数だけじゃないよという部分においては、コンテンツは若い人に絞ってその人たちの割合が、総数ではなく、どのぐらいを超える目標にしますとか、何か展示のネームバリューだけではない、皆さんのお仕事の中での努力ができる目標設定というものがあってもいいのかと思いました。それでいうならば、本当に有名なものを持ってくれば当然、増えますが。そうではない、数字になりやすいというか、努力しやすいという言い方はなんですが、努力したら伸びるものという設定もあるのかなと、皆さんのお話を聞いている中で思いました。以前も私、漫画とのコラボと言ったのですが、校長先生もいらっしゃるところで言えば、必ず教科書に載っている人たちの直筆のものがあるという、これはすごい財産だと思っておりまして、もし自分がその立場だったら何をするかと思ったら、45 分とか 50 分授業の 2 コマ分を、ここを見学して、その本物を見ながら学芸員さんに、この人はどういう性格でというような話をしてもらいながら、特別に見られるようなコース、たとえば芥川龍之介とか、飯田蛇笏や龍太とか、そういったコースがあるのであれば、それはすごい魅力なのかなと。学校の先生たちも、じゃあ半日のコースで、国語の一環として周りますとか。そういうパッケージがあれば、それは

多感な生徒、学生たちにとっても非常に、全員が興味を持つわけではないんですが、必ず 100 人に 1 人とか反応してくれるんではないかなと、私は思いました。そういうパッケージをいくつか持っていて、見学コースとして特別ここは見せられます、というものをお持ちいただければ、それも魅力につながるのかと思いました。あとは、文学館の全国の繋がりの中で、それこそ、若い人が来る展示って何なんだろうかとか、情報交換をすることによって、より高められる可能性があるのかと思いました。以上です。

事務局　ありがとうございました。一時間の授業のパッケージというお話をいただきました。今、常設展では、「わたしはだあれ」というクイズを、小中学生や高校生が来たときには行うようにしています。そのクイズもやったままではなくて、最初に太宰とか、芥川といった何人かの作家の説明をしてからクイズに取りかかるということをやっています。先ほどもお話があったように、全員が全員、くらいついて話を聞くところではないので、なるべく興味をもてるような内容を入れながら、それぞれにクイズに取り組んでもらうようなかたちで、現在行っています。

委　員　たぶんそれでいうと、毎回展示が変わる中でやるような状態だったりするのでしょうか。もしかしたらレギュラーなパッケージ、芥川龍之介コースとかをもっていて、基本的この展示だけは見せられるみたいなものがあると、たぶん学校側としては、逆に毎年同じ、毎回同じものであっても、子どもたちにとっては初めてなので、そういったレギュラーなものがいいのかなと。展示の場所っていう部分での制限はあると思うのですが、コースみたいなものが、こういう所で、こういうものを持ってきてみんなに見てもらうというレギュラーなものが一つ、二つあって、何十年も使えますというのでいいのかなと思いました。

事務局　基本的には「わたしはだあれ」というクイズは 12 名の作家を扱っていて、それはすでに常設展で展示をされている、今お話にあった、レギュラーと言われれば、もう超レギュラーな方たちで、それで説明させていただいてすすめております。

事務局　児童生徒に向けてのそういった対応もある一方で、先ほども出た「教師のための学習会」というのを、夕方の時間帯の一時間くらいで、展覧会ごとにやっています。なかなか先生方はお忙しいので、みなさんが集るというのは難しいのですが、各回、数名から 10 数名ぐらいの先生方に来ていただいて、文学館の展示について、学芸員が説明するという機会を設けております。その他には、教育センターとの共催の研修ですとか、教員の方の初任者研修でも文学館をご利用いただいています。今回は、企画展が夏の時期で、かがくいひろしということもあったので、地区の図書館部会の先生方ですとか、国語の教員の勉強会でも、文学館をご利用いただいていまして、その辺は、団体ごとにこちらで対応しています。今おっしゃっていただいたように、芥川龍之介を説明できるプログラムがあったり、太宰治のものがあったりといったかたちで、今後できるといいかと考

えたところです。本当にありがとうございました。

議　長　　ほか、いかがでしょうか。

委　員　　初めてなので、皆さん感想も言っているので、ちょっとだけ感想を言わせてください。私も「かがくいひろしの世界展」をすべて観させていただいて、とても楽しく観させていただきました。展示してある本もすべて読んで、視覚的にこういうものはすごく楽しめるんだなというのをすごく感じました。普段私は、テレビという世界で働いているので、テレビはどうしても見て、あと音が付いてきます。かがくいさんの絵本というのは、本当に擬音を大切にしてる絵本だと感じました。だるまさんが「どてっ」とか、「ぎゅーん」とか、「ぷしゅー」とか音がありましたけれども、どうしても文学というとやっぱり文字だと思うんですけど、見ていて私はその擬音が、頭の中で自分が想像して、こんなふうなんだろうなというのがあるからこそ、ほくそ笑んで面白いなというところもあるんですけど、その擬音が実際にどういうふうに思い浮かべているのかというのが、100 人いれば 100 人分、違うように感じました。そういうことを、プロの読み聞かせじゃなくてもいいし、素人さんでもいいので、ああいう擬音のことを、もっと企画の中に盛り込めないのかなと、ちょっと漠然とした感想で申し訳ないんですけれども、感じたところがあります。今回の企画展、かなり長い期間やってらっしゃるということですけれど、やはり私も、時間がある時に観させていただいたんですけれども、満足はして帰りました。よかったなと思ったんですけれども、やっぱり観覧者数を増やすとか、人にもっと来てもらうということでは、やっぱりリピーターを増やすということも、ものすごく大切だと思います。もう一回この期間中に、あそこを見てみたいなとか、行ってみたいなというのが大切だと思うので、そうするとその、ちょっと企画展の中で違ったことをやっている、今回でいうと、その擬音の言葉、一週間後に来るとまた違う言葉の擬音が聞こえますよとか、なにかその音がまた変化がありますよというようなことがあると、もう一度この文学館に来て企画展を楽しむということも、あり得るんじゃないかなと思ったので、あまり文学のことは詳しくなくて、かがくいさんのことも今回観させてもらった感想になってしまいますけれども、なにかそういうアイデアを出していくことも大切じゃないのかということを感じたので、言わせていただきました。

事務局　　ありがとうございます。今回の「かがくいひろし展」は、展示替えは盛り込まれていないので、リピーターというところに繋げる工夫というのは、なかなか打ち出しにくいかと思いました。こういった展示の機会には、リピートしてもらえるような工夫も、大切だなと今思ったところです。擬音語が非常に特徴的な作品だということで、展示室の一番右手の奥に大きなアニメーションのコーナーがあって、そこに敷いた絨毯の上で、そのアニメーションに合わせて、本当に多くのお子さんが声を出しながら、だるまさんの動きをまねていて、あ、子どもはこういうふうに絵本を享受するんだということを、私自身も認識させられたところもありました。文学というものが、難解さもあるけれど

時代を超えて評価され続けている文学作品がある一方で、文学の入口としてこういったものも打ち出して、きっかけにしてもらうということが非常に大切だということを今、委員のお話を伺いながら改めて思いました。

委　員　　皆さんのお話を聞く中で、やはり文学館としての本来のというか、山梨県のゆかりの資料とか研究というのも大事にしていくことと、今、皆さんおっしゃっている、来館者を増やすためにハードルを下げていくというか、よりいろんな層の多くの方に観てもらう、来てもらうということが、魅了アップにつながっていくのかなということです。最後の方にあったんですが、地域との連携とか、商店街、小学校との連携というところも、すごく大事なのかなと思います。先ほどパッケージによる子どもの見学の提案もあったんですが、県の方でも観光のところに力を入れていると思うので、例えば湯村温泉の旅館明治が新しくなりましたけど、太宰が滞在した部屋を再現しているとか、そういうところの繋がりで、旅館に来た人、湯村温泉に来た方にも、文学館にも足を運んでもらうとか、観光としての何かパッケージみたいなもの、より広げて、県内の太宰ゆかりの地、天下茶屋とか、甲府市内の太宰が住んでいた場所とか、そういうなにか実際ここで見て、地域を歩けるような、そういうパッケージなんかもあると、県外から来た人、外国人が太宰に興味があるかわからないんですけど、いろんな方に興味を持ってもらえるのかなと思いました。あと「一葉さん、おじゃまします」というタイトルも、すごい面白いなと思ったんですけど、ちょうど南アルプス市立美術館で、田中達也さんっていうミニチュアの作家の方の展覧会が 9 月から始まります。朝ドラの「ひよっこ」のタイトルバックになっていた作品です。なにかこうちょっと共通点、ミニチュアの世界を楽しむようなところにも、繋がるのかなと、ちょうど会期がかぶって、そういう県内の市町村の施設との回遊性や、何か連携ができるといいなと思います。

事務局　　貴重なご意見をありがとうございます。「一葉さん、おじゃまします」展が秋に始まりますが、樋口一葉は、両親が塩山出身ということで、ゆかりの作家として常設展でも展示しておりまして、これまでも企画展を何度か開催しております。これまでの展覧会は、やはり一葉の小説、作品、一葉の直筆の資料の展示、というのが主流だったんですけれども、明治時代に書いたもの、あるいはくずし字で書かれたものというのは、なかなか今、読むことが難しくなってきておりますので、敷居が高いというようなご意見を伺っておりました。その中で、10 月 10 日から始まる「一葉さん、おじゃまします」の展覧会は、一葉が住んだ家だったり、一葉の「にごりえ」の舞台になった菊の井という建物だったり、いわゆる模型で、だいたい 20 分の 1 の縮尺で造られた明治時代の建物の模型を展示します。そしてその室内を特殊な針穴カメラという、小さなバンドエイドの缶に穴を開けた、手作りのカメラで撮影したモノクロ写真を展示して、明治時代の一葉が実際暮らした家ですとか、その生活の様子などを、見る方に実感してもらおうという視点からの展示になりますので、文学愛好者ではない方も来ていただけるのではないかと期待しております。今、委員がおっしゃってくださったように、南アルプス市立美術館で

9月20日からミニチュアの展示が行われるということで、ぜひあちらとも連携を取りながら、お互いの展覧会を盛り上げるように一緒にやっていきたいなと思います。また、その前にお話いただいた、湯村温泉の旅館明治のことなんですけれども、あちらの建物が新しくなるということで、同時にその旅館の館内に、新しく造られる太宰治記念室が非常にきれいにリニューアルされましたときに、その解説につきまして、ちょっとアドバイスなどで協力させていただいたところもあります。そのときに観光の拠点として、文学館、旅館明治、それからゆかりの場所などを巡るようなことができたらというお話も出たところです。いろいろなところにチラシを置かせていただいたりしているところでございます。今後もすすめさせていただきたいと思います。

議　長　　様々ご意見いただいているところですが、もし触発されて、もう一回何かということがありましたらお願いしたいと思いますが、いかがでしょうか。よろしいですか。

では様々ご意見をいただきました。私もうかがっていて、刺激を受けながら聞いていたところではあるのですが、観覧者数の根拠というところもですね、なるほどと思ってうかがっていただいたところであります。銭天堂の展覧会というのが令和5年度ですから近くはあるのですけれども、子どもの数がどんどん減っている、山梨県の子どもの数、急激に減っておりますので、その中でこれだけの数が出ているということの意味を、やっぱり考えて行く必要もありますし、目標値の設定の中で子どもが減っている観点もあってもよろしいのかなというふうに思った次第であります。それから、若い方々が様々ないろいろなご意見も言ってくださっていましたけれども、次に繋げるっていうのもやはりどうすればいいのか、これだけ多くの方が来てくださって、あまり普段は文学館には来ていなかったかもしれない、そういう方が来てくださった中で、どうやって文学に誘っていくかっていうのが次の課題になってくるのかなというふうに思うのですが、多くの方が来た中で、いったい何がよかったんだろうか。かがくいひろしという、最初はネームバリューで来たのかもしれない。あの絵本は読んだことがあるという気持ちで来られたんだと思うんですけれども、これだけ伸びているということは、その中で、たぶんここの展示物の中に何かを見つけた、よかった、と思う何かがあったはずなので、それが何だったのかということを分析されると、それが様々な展示物の中でのヒントになるかも知れないなというようなことを思って伺っておりました。どんな切り口がヒントになるかということで、伺いながらちょっと考えてみたのですが、インスタで太宰の作品の中から、文章を抜き出したものが非常に好評であった、閲覧数が伸びていたという話があったと思うんですけれども、そういった作品にはそれぞれ、文章の力が宿っていますので、そういったものに何か心を打たれた、今回オノマトペ、擬態語がでておりましたけれども、それは作品によっていろんなものが、要素があると思うんですけど、その文章の力みたいなものを、来た方が受けとめたんじゃないかとか、それから、かがくいひろしさんであれば、こんな生き方をされていたんだなというような、その人自身の生き方であったり、作中人物の生き方でもいいと思うんですが、その“生き方”というところに心打たれるということもあるんだなぁというふうに思いました。そんなような、

どんな切り口がヒントになるのかなというのを、ぜひ考えて展示をしていただけると、より良く多くの人が心打たれるかなというふうに思っております。

また一葉の展示が今後あるということで、様々な工夫がなされていることも理解いたしました。では今度、一葉の作品を読んでみようかなという人が出たときに、この作品がおすすめです。ご自身で見つけられるかも知れないんだけれども、見つけた作品を、この文庫本だと読みやすいですよとか、樋口一葉ってやっぱちょっと読みづらいと思うんですよね。そういったおすすめ、漫画でもこんなのがありますよとか、そういった幅広い層への誘い方というのが、あるのかもしれないなというふうに思いました。またご意見で、地域との連携であるとか、教師のための学習会が行われているということの中で、地域のネットワーク、関係者のネットワークを広げていくというのも、これは本当に地味だけれども力になっていくんじゃないかなと思います。近隣の小学校、幼稚園で、子どもたちがここへ来たというと、保護者の方が、「あ、そうなの。行ってみよう」っていう話になったり、またそれが周りの学校とか幼稚園に広がって行くということがありますし、先生方が興味を持てば、それが子どもたちに話をされて広がっていくということもありますので、是非にと思っております。それから、地域のこんな歩き方がありますよっていうのも面白いですよね。文学散歩ではないですけれども、この作品であれば、こんなところを廻ると、山梨のこんなところが見られますよっていうのも、面白いなと思って伺っておりました。様々ご意見を伺った中で、私が聞いていた中で述べさせていただきました。皆様、なにか重ねてご意見ございましたらお願いしたいと思いますが、よろしいですか。

委　員　　先ほど、インスタのフォロワー数が 5,705 人だというお話をいただいていて、一方で、その観覧者数以外にどんなことを考えられるかなと思ったときに、文学館がやっぱりこう山梨県民の方と結び付いていることがすごく大切、リンクしていることがすごく大切なのかなというふうに思ってですね、例えば 5 千人というと、山梨県の人口って 80 万人をちょっと切っていますけど、おおむね 80 万人とすると、160 人に 1 人位がフォロワーになっている、5 千人全員が山梨県民としてなんですけれども、160 人に 1 人というと、昔だったら 40 人学級だったら 4 クラスで 1 人だけが文学館と繋がっているみたいなイメージ、25 人学級だったら 6 クラスちょっと 7 クラスくらいに 1 人という感じなのかなと思いますけれど。今、議長からもお話がありましたけれども、子どもだったらば樋口一葉は難しいんだけれども、そこにどういう補助線を引いたらば子どもたちにも価値が伝わるよなんていうのは、もし、LINE のお友だち追加みたいなかたちで、もし仮に文学館と子どもたち、あるいはもう少し年配の方が直接繋がるようなかたちになっていけば、仮に来館者数が増えなかったとしても、文学館がいつも県民の方と繋がっているなんていうふうなことが実現できるんじゃないか、ということを思いました。かがくいひろしの展示にしても、昔の銭天堂にしても巡回展ですが、一方で文学館の日頃の活動とか工夫する余地とか、なかなか難しくできない部分がある中で、その日頃の活動の成果をうまく、県民の皆さんと繋がりながらやっていくためには、と考えるとなんとか率

もさることながら、先ほど議長からもおっしゃったことで、私もそれで児童数とか生徒数とか調べてみたところもあってですね、どのくらいの人と繋がっていたらば、文学館として浸透している、一番最初に、文学に関する知識を深め教養の向上を図るという説明がありましたが、そこはどのくらいリンクしているかというのが、すごく大切な指標になるのかなと思いました。新しいLINEなのかインスタグラムなのかよく分からないですが、フォロワーというか繋がりみたいなものっていうのも、もっと考えていってもいいのかなと思いました。同じような観点からすると文学資料の見せ方というか、価値の見せ方というのは、たぶん観光も同じなんですけれども、やっぱりストーリーといいますか、資料を見る方が違っていて、お子様もいれば、教師の方もいれば、高齢者の方もいれば、普通に勤め人の方もいる中で、相手によってその伝え方とか、見せ方というのは、結構変わっていくんじゃないかなと思うんですけれども、そんなことを意識しながら工夫されるといいのかなと私もそんなことを感じました。

事務局　ありがとうございました。巡回展の中ですと山梨の文学館という特徴を出すのが難しくて、巡回展は文学館の敷居を下げる、より広く多くの方に来ていただくというふうな、割り切り方をしつつ取り入れているところです。以前女性の40代ぐらいのグループの方が5～6人来たときに、たまたま常設展を案内したら、そこにいた5～6人の方のうちのお一人だけが飯田蛇笏を知らなくて、ほかの人はみんな知っていたんですよね。小学校か中学校のときに文学館に来たことがあって、飯田蛇笏を知っているよと言ったけど、お一人だけ県外の出身で飯田蛇笏を知らないと言ったのです。そういうふうに地域の誇りとなるような文学者を、県民に知っていただくということは、本当に文学館の大事な使命だなと感じたことがありまして、その大切な文学の遺産を幅広く知っていただき、後世に引き継いでいくということをいろいろな形で工夫して、皆さまにもお知恵をいただきながら、続けていくことができたらいいなと今、委員のお話をききながら思っていたところです。

委　員　ありがとうございました。ちなみにさっきスマホで検索していたんですね。「かがくいひろし展」を見た人はSNS上でどういうふうに発信していますかって尋ねると、すぐ拾ってくれちゃうんですね。「かがくいひろし展」を見た人が常設展に関して、どんな発信をしていますかっていうのも、結構拾って来てくれまして、そうするとその中では、例えば企画展の賑やかな雰囲気とは対照的に、とても静かで落ち着いた空間で、実り豊かなひとときを過ごせましたとか、大人も満足しました、なんて、簡単に出てきてしまうので、そこには実際にどのくらいのウエイトを占めているのかといったことを、一応まとめながら、ふり返りをしながら、今後に活かしていくというのは、わりと簡単にできるようになってきているかと思うんです。そういうものを活用しながら、次の施策といいますか、取組といいますか、チャレンジに上手く活かしていけたらいいなと思いました。

議　長　　様々なご意見をいただきました。ぜひ県民に愛される文学館であってほしいと思いますし、また且つ、文学館の持っている研究の高さ、それを維持していただきたいというふうに思っております。では、ご意見出尽くしたようですので、次に移っていきます。

「三 その他」につきまして、何か委員の皆様からご意見などありますでしょうか。よろしいですか。

特にないようですので、以上で議事を終了とさせていただきます。ご協力ありがとうございました。

（終了）